第 112 回公開シンポジウム

保育教諭の時代

◆プレゼンター　赤西雅之
社会福祉法人子どもの家福祉会理事長・幼児学舎子どもライブラリー理事長

◆パネリスト　梅﨑高行
甲南女子大学総合子ども学科准教授／発達心理学・保育心理学

◆司会　一色伸夫
甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：「子ども学」講演会第 112 回です。テーマは「保育教諭の時代」。お二人のすばらしい先生方が、楽しくお話してくださるとのことで、私も非常に嬉しく思っております。乳幼児教育・保育の現場は、多くが認定こども園に移行しつつあります。まもなく「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示され、平成 30 年 4 月より施行されます。認定こども園の先生は、保育士でなく、幼稚園教諭でもなく、正式な名称として、「保育教諭」と呼ばれるわけです。しかし、保育教諭という資格はありません。「保育教諭」とは何なのか？ 求められる資質について今日は考えていきます。

では、プレゼンターは甲南女子大学総合子ども学科で教授をされていた赤西雅之先生です。略歴をご紹介させて頂きます。大阪府立大学をご卒業後、障がい児統合園幼児学舎子どもライブラリーを設立され、社会福祉法人子どもの家福祉会理事長に就任されました。現在は理事長の仕事の他に全国各地で新しい保育理念と方法を指導されていらっしゃいます。ご著書は、『モンテッソーリ入門』『自由な子どもの発見』『子どもの自由世界』『保育かわらなきゃ』『生まれかわる保育』などがあります。

パネリストは、皆さんよくご存じの総合子ども学科の梅﨑高行先生です。早稲田大学大学院人間科学研究科生命科学専攻博士課程を修了され、ご専門は発達心理学、保育心理学です。本学では保育実践、教育実践、指導実践における教授学習過程を担当されております。社会性の発達を縦断的に研究して、コホート研究をされている先生です。

では、赤西先生、よろしくお願いいたします。

赤西：皆さん、こんにちは、赤西です。今、梅﨑先生のご紹介のところで笑いが出てましたが、そりゃそうやと私も思いましたよ(笑)。今日は梅ちゃんと一緒にできるというので(笑)、ああ失礼しました、梅﨑先生と一緒にできるのでとても楽しみにやってきました。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

今日は「保育教諭の時代」とテーマを掲げています。その前に皆さんにアンケートをいただきましたね。「認定こども園についてどう思いますか」という賛否のアンケートでした。その結果を報告しておきます。「賛成する」が 123 名中 73 名で 59%、「反対」123 名中 6 名で 5%、「どちらとも言えない」が 44 名で 36%。「賛成する」人の意見としては「幼稚園、保育園両方の機能があるので、保護者には助かる」「選択肢が増える」「時間が選べる」「1 号と 2 号が自由に行ったり来たりできる」、便利だということですね。それから「幼稚園に通っている子どもも保育園に通っている子どもも、学びや保育の思想を均一にすることができる」、ああ、これはとてもいい意見ですね。今日はその教育保育要領の話をします。それから「保護者が働いている、働いていないにも関わらず教育保育を同じように受けることができる」「待機児童対策に有効である」「幼保連携ができるため長い期間を通して子どもを育てることができる」、これもとてもいい意見ですね。0 歳から 5 歳までの子どもたちを一貫して一つの施設で見ることができるということですね。「さまざまなタイプがあるので、地域の状況や多様な保護者のニーズに応えられる」。

それで「反対」の意見ですが、数が少なかったんですけれども「統廃合することによって施設の数が減って、通園しにくくなる」、これは非常に現実的なお話で、こういうことをよく学生の方がご存じやなあと思うんですが。実際に地方に行きますと、特に過疎地に行きますと統廃合で子どもがすぐ近くの園に行っていたのに、とても遠い園に通わなければならなくなるという、通園の不便さは大きな問題になっていますね。「0 歳からの乳児を幼稚園に通わせるのに環境が整わないのではないか」、幼稚園というのは学校ですね。学校は 3 歳から対象に教育活動をしています。乳児の知見の蓄積がない、経験がないんですね。0 歳から 2 歳までの。これは、元々は、乳児保育は 3 歳以上児とは別に保育していましたけれども、最近は保育園の中で 0 歳から 5 歳児までみることができますね。乳児の保育の積み重ねは圧倒的に保育所ですよね。それでご心配みたいで、「幼稚園に通わせるのに環境が整っていないのではないか」と。これは当初から言われていましたので、認定こども園にすると切り替えた幼稚園は、その対策をとられていると思います。もちろん給食も自分の園で作りますしね。そういったことに対する補助金も出ています。それから「乳児で職員の数が増えてしまうので、保育士不足がますます深刻になる」、これはすごい問題で、皆さんもよくご存知ですよね。なんで保育士が不足すると思いますか。それは資格を持っている人が仕事をしない、何十万人もの方が眠ったままなんですよ。早くに 2、3 年で辞めてしまう。給料が安い。いろいろ言われていますが、どれも本質は突いていないですね。今日はこの話をすることはできませんけれども、授業に戻って皆さんで議論していただいたら嬉しいかなと思います。

それから「どちらとも言えない」の意見の中に、「実態がよくわからない」ということがありました。このことについては、すべての皆さんに共通しておりました。皆さん「認定こども園」のことはあまり勉強されていなかったと思います。少しずつの情報で、全体像がまだ見えていないのかな。これは授業で、どの授業が受け持ってくださるのかわかりませんが、先生によくお願いして「認定こども園」の全体像をよく学習しておいてください。

皆さんが 4 年生になって就職をするときに、おそらく「認定こども園」がもっと増えていると

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

思います。昨年度で4001カ所になっています。4、5年前は200カ所くらいでした。すごい勢いで増えていますよね。昨年度で言えば、幼稚園が1万1000余り、保育所が2万6000余りあったかと思います。で、認定こども園が4000カ所。数から言うとまだまだ少ないんですけれども、子どもをどう教育・保育するのかというカリキュラムと、運営する側の運営費（公金）の扱い方、公のお金ということですね。この扱い方が認定こども園向きに出来上がってきています（1号、2号、3号といいます）。なので、おそらく、これから認定こども園はどんどん増えてくると思います。もうやむを得ず、そうなっていきますよね。さまざまな問題は抱えていますが、これから増えていくと思いますので、皆さんが就職されるときに希望される園がどういう傾向、形態をとっていらっしゃるかとっても大事です。認定こども園は一体どういうものなのかという全体像のお勉強は、ぜひ学生の間にしておいてほしいと私は思います。アンケートを読ませていただいて、かなりしっかりと書いている方もいらっしゃいましたが、数が少なかったですね。まだこれからかなあと思いましたので、これからの宿題にしておいてください。

今日は、そういうシステムとか行政のお話はしません。これからの課題として、おそらくこうなっていって、平成30年の4月から教育保育要領が改訂されます。保育所保育指針も、幼稚園の教育要領も改訂されます。それはもう出てきております。私も何回か通して読みましたけれども、これはナショナルカリキュラムと言われるくらいにレベルが高くなって、幼保連携型認定こども園教育保育要領という形で一本化されてきております。これはぜひ目を通しておいてください。これはすごくよくできておりまして、2年ほど前に、ここで東京大学の秋田先生がお話されました。私もご一緒させていただきましたが、秋田先生方が中心になって作られたものですね。その後日談を読ませていただきました。その中で、「今回、これを出すけれども次の課題が残っております」と。やっぱり先を見通している方たちはいろんなことを考えていらっしゃる。「次の課題が残っています。今度はそれに向き合っていきたいと思います」と書いてありました。今日はその次の課題について話をします。私も読み終わって、何回か読んで、ああ、課題あるよなあと思っておりました。生意気なようですけれども、そこが重なっておりまして、今日は一番最後にその話をみんなと一緒に考えるということで進めていきます。

とりあえず、おさらいをしておきます。パワーポイントを見ていただいて、保育士資格、ご存知ですよね。これは児童福祉施設ということになります。こういった文言は、皆さん、よくご存じですよね。もう説明はしませんので。あくまで保育士資格は児童福祉施設の対応する資格ということですね。以前は、保母、保父という言われ方をしておりましたけれども、国家資格となりました。養成校、皆さんがいらっしゃるこの大学でも保育士の資格を取ることができますし、国家試験もありますので、各都道府県で行っておりますけれども、そこでの試験も受けて合格することはできます。幼稚園教諭というのは学校の先生、学校ということになります。学校教育法ですよね。これもよくご存じ、専修、一種、二種とありますけれども、お勉強された年数、取ったカリキュラム、単位によって資格も変わるということですね。これは基本的に学校ということに

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

なります。そして認定こども園ですけれども、認定こども園というのは幼保連携型こども園と思っていただいて結構です。今４種類ありますよね。ご存知のように。おそらく国は一本化してくると思います。やがて、ですけれどもね。この４種類が非常に煩雑で現場も混乱しているんですね。やがてこれは一本化されるだろうという見通しで取り組まれておりますので、今日は、幼保連携型認定こども園を念頭においてお話を聞いていただいたら結構です。

教育保育を一体的に行うということは、学校であり、同時に児童福祉施設でもあります。という二つの機能を持ち合わせています。その下に図が描いてあります。これはよくわかりますね。認可、認定されたところ、左側は幼稚園、右側は保育所ですね。そしてそれは一体的に提供しましょうということですね。年齢はもちろん０歳から５歳児になりますね。で、類型がご存知のように４類型ありますね。このあたりはよくご存じだと思いますので、どんどん進めさせていただきますね。

一番左側の幼保連携型というのは学校と児童福祉施設、幼稚園は学校、保育所は児童福祉施設、地方裁量型は両方の機能を持ち合わせていますよということですよね。そして、その真ん中が書いてありますよね。資格要件ですが、保育教諭が教育保育に携わるということです。ただし保育教諭という資格はありません。皆さんが学校で勉強して取られる資格は幼稚園教諭専修、一種ということですね。それから保育士資格、この２つです。国が認めているのは、この２パターンですよね。保育教諭という資格はありません。これはあくまで名称です。ただし幼保連携型認定こども園については、学校、児童福祉施設ですから、平成30年度からはこの両方の資格を持った職員でないと子どもを扱うことはできません、というふうに決めました。そして何年か前から経過措置として進めていますけれども、いよいよ30年から本格的にその運用が始まります。なので、今、皆さんはどのコースで勉強されていますか。資格はもちろん学校の教職の方を目指す方もいらっしゃるでしょうが、保育士と幼稚園教諭の両方が、これからは幼保連携型認定こども園では必要になるということ、これはよく覚えておいてください。

そして中身に関しては、教育保育要領というのが、幼保連携型認定こども園では平成30年から改訂になります。で、目標が書いてあります。まあ、この辺も読んでおいていただいたらわかります。保育士の指針というのがあります。最初に目標で掲げてありますね。「生命の保持と情緒の安定」、簡単に言えば、子どもの命を守って、毎日を笑わせようという話です。それのずっと延長線上にありまして、より細かく丁寧に書かれています。そして、大事なところがあります。大きく変わってきたところは、子育て支援の項目が増えたことですね。未就園児も含めて子育て支援については、国はずいぶん力を入れて来ていると思います。この背景にあるのは、幼児虐待であったり、子どもの貧困問題、待機児童の問題、こういった社会的な問題が背景に隠れていますね。なので、国はそこらあたりにすごく力を入れていますね。

さて、ここからが問題です。「幼児教育において育みたい資質、三つの柱」、これは保育所保育指針も幼稚園の教育要領も同じです。同じ文言が使われています。「知識・技能の基礎」「思考力・

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

判断力･表現力の基礎｣｢学びに向かう力･人間性等｣と書かれています。そして囲み枠があります。｢遊びを通して｣と書いてあります。これ、すごく大事です。はっきりとこれが書いてあります。ということは､乳幼児教育で教室形式で何かを教えるというのはちがうということです。国ははっきりと打ち出しました。環境を整えて遊びを通して、三つの柱を、ということですよ。

ところがですよ。にもかかわらず、今の先生たちが遊べない。皆さんはどうですか。私は梅﨑先生に言いました。｢学校の中に砂場を作ったらどうや｣と。先生が砂遊びができない。砂遊びをしましょうと言ったら、型抜きでポコポコ抜いて、それをじーっと見ているだけです。子どもたちが泥にまみれて、身体中泥だらけになって、先生も靴脱いで泥だらけになって、みんなで何かを作り上げるというふうな、いわゆるダイナミックな、子どもと共有、共感できる遊びを先生ができない。なんでですかね。君たち、できますかね。もう、これ、できなきゃだめです。書いてあるんだから。｢遊びを通して｣です。先生がえらそうに教室形式でみんなに教えて､こうですよ、ああですよと教える、これは違うんだよということです。幼稚園においても同じです。一日 4 時間、年間 39 週以上の縛りの中で、4 時間の授業形態、カリキュラムを組んできちっと子どもたちに何かを指導する、5 領域に基づいて、なあんていう時代がありましたけれども、そうじゃない。認定こども園になると最低でも教育時間はもっともっと伸びる、預かり保育もある、その中で環境を整えて遊びを通して、子どもを理解して育てる。遊べなきゃだめです。ところが、今、先生たちが遊べない。これが困った。皆さん、まず、そのことを頭のすみっこに置いといてください。

そして､この三つの柱の一番下を見てください。｢学びに向かう力･人間性｣と書いてある。知識･技能は測る方法があります。思考力・判断力・表現力、これも数値化する方法、あると思います。三つ目はない。｢学びに向かう力｣ってどうやって数値化するんですか。どうやって普遍化しますか。どうやって概念化しますか。どうやって人に伝えるんですかね。先生はどうやってこれを教えるんですかね、教える方法、ないんですよね。見えないから。｢学びに向かう力｣って見えないんですよ。この見えないものを、これからもっと大切にしましょう。先生は見えないものをよく見て、子どもの見えない力を育てましょうと、わけのわからん話ですわ。これが次の時代の改定の新しいテーマになってくると思います。今日、この話をします。だから、今日の話はわけわからん話ですよ。見えないものを見る話だから。でも、これが必ず何年か先になって意味のあることに繋がってくると思います。ここを梅﨑先生と一緒にやりたいと思います。

とりあえず、ちょっとまとめを先にやります。｢幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 10 の項目｣、これはもう、よく出てきました。これは保育所保育指針にも書いてあります。これ、よく読んでおいてください。まあ、読んだらなるほどなあと、5 領域もこういったこととかぶさるところがありますので、なるほどなあというところです。なるほどなあ、ぐらいでいいです。そんなにむずかしくも何ともないですので。これには注釈が付いていますから、指針を読んでいただいたら、注釈が全部付いていますから。保育所保育指針、幼稚園教育要領、ボロボロになるまで

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

読むんですよ。非常に幅が広いです。日本独特やと思いますね。あまり細かく指示をしていない。そういう意味では日本のカリキュラムはとってもよくできていると思います。私は好きですね。だから、考え方によってはいろんな捉え方をしてしまうんですけれども、幅の広い分だけ多様性は活かされると思います。なので注釈を良く読んで勉強しておいてください。

さて、ここに来まして、幼児教育、なんか図が描いてありますね。これは国が出した図と同じですが、この一番下に「学びに向かう力」と、書いてあります。これが今日のテーマになります。それから、小学校以上では一番右側に「学びに向かう力」と書いてあります。やっぱり目に見えないものということですよね。これを今日はちょっと話をします。

今日のテーマはここからです。話を聞いてもらって、一緒に考えてもらったら結構です。「子どもが学びに向かう力を評価する」と書いてあります。どんなことをいうか、一つ事例を挙げます。これ、ご飯食べてます。4歳児の新入園児です。ちょっと悩んでます、ちょっと苦手な食材だったんですね。このお嬢さん、これがおもしろいんですね。おでんが食べられない。おでんと小松菜と玄米ご飯でした。小松菜はあっという間に食べました。お野菜は好きみたいです。玄米も初めてなのでポツポツ食べました。問題はおでんです。じゃがいもと厚揚げとひら天です。3種類です。じゃがいもは結構食べやすかったみたいであっという間に食べた。問題はあと二つです。こうやって、ずーっと悩んでます。そして次にお皿をくるくる回します。そうすると厚揚げの中が白いのに気が付きました。わかりますよね。そしてお箸で割って中の白いとこだけ取って、ちょっと食べてみてウェーって。こんなもの、みたいな感じです(笑)。そしてまた、くるくるお皿を回している。なかなか進まない。そのうち下を向いてブツブツ何か言い始めます。何を言っているのか、よくわからなかったです。ただお経のように唱えます。ブツブツ、ブツブツ文句言います。で、くるくる、くるくる回して、またハァーとため息をつく。これがすっごくかわいくて、おもしろくて。そのうちに友達が何人かドアのところまで来て、「ちえちゃん、もう行くよ」と誘います。で、この子は硬い笑いを返して、「先、行ってるからね」と友達は行ってしまう。で、この子はまたお皿をくるくる回して、ハァーとため息をついてブツブツお経を言い、その繰り返し。結論から言うと、先生が「1時になりました。レストラン閉まりますよ」と声が掛かったとたんに、すっごくはじけたように、うわーっと食べて知らん顔してパッと出ていきました。あ、なんだ、食べられるんじゃん(笑)。この間、だいたい15分から20分です。

後で考えてみたんです。4歳にもなると、いろんな知恵を働かせて苦手な食材から逃げる方法はいくらでも知っています。たとえば、「先生、おしっこ」、「ああ、行っておいで」、トイレに行ったまま帰って来ない。これ珍しくないです。ごちそうさまと言って行ってしまった後に、その子のテーブルの下にきゅうりだけ全部落ちているとかね(笑)。知恵はいくらでも働きます。お腹痛いとか、お腹いっぱいとか、いろんなことを考えます。苦手な食材を食べないで逃げる方法、ありますか（学生に質問)。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

学生 A：誰かにあげる。

赤西：すごいね(笑)。いるわ、そういう子。横に座ってる子にこっそり移すという。君、どうします？ ちなみに君、何か苦手な食材ありますか。

学生 B：ピーマン。

赤西：ああピーマンかぁ。どうします、出てきたら。

学生 B：他の味でごまかす。

赤西：ああ、なるほど。お母さんも考えますよね。焼き飯に混ぜたらわからなくなるからと、ピーマンの味がしなくなるからと。でも、それ、ごまかしとんや、堂々とピーマンを食べさせましょうと親には言いますが。

　でも、この子は逃げなかったです。先生は新学期のこの頃はちゃんと食べなさいとは言いません、無理しなくていいよと。新学期ですもん、無理ですよ、かわいそうや。無理しなくていいよと見てます。でもこの女の子は逃げない。知恵も働かせない。で、この顔でずーっと考えて、ため息をつき、お皿を回し、でも最後の瞬間には食べきって出ていく。なぜ逃げなかったんですか。これ､｢向かう力｣です。この子は食事に向かう力があったと言えます。なぜ逃げなかったんでしょうか（学生数人に質問するが、なかなか答えられない)。想像してみて。今までの話、わかりましたか。なぜ逃げないんですか。なぜ食べきるんですか。もういらないって言っても先生は許してくれるんですよ、新学期だから。

学生 C：食べたい気持ちがあったから。

赤西：食べたい気持ちがあった…。向かう力って勝手には出てこないんですよ。何かに向かう力っていうのは。これを育てましょうということですよね。三つの柱にありましたね。どうやって育てるんですか。こんなもの、ほっといても、たとえば、いろんなむずかしいことやって、いろんな企画をやって、これを育てましょうと言っても、なかなか具体的にはむずかしいです。向かう力にはそれを押し上げていく何らかの理由が後ろに絶対あると思うんです。それは教育保育要領に書いてないです。

　ここからは私の考えです。この子に関して言えば、飯は絶対食うものだと彼女は決めているんです。出されたものは絶対食べるべきだと決めているんです。誰かに言われているわけじゃない。先生に「食べなさい、ちゃんと。最後まで食べなさい。お野菜も」とは言われていない。自分で決めているんです。自分で決めているから､時間をかけても最後までたどりつきます。なんで、

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

自分で決められるんですか。そういう子いいですよね。そういう子に育てましょうよ。最後までやり切るぞという子どもに育てましょうよ。どうしたらいいんですか。ここも考えないと。おそらく、出された食事はきちんと最後まで食べ切るものだと、大人に対するイメージがここに見え隠れすると思います。たぶんお母さんでしょう、お父さんかもしれない。子どもが健康であるために、これだけの栄養量を計算して、保育所、幼稚園はきちっと栄養計算をしてその日のカロリー計算をして出すんです。ピーマンも、だから食べなあかんのです。大人は子どもの健康を考えてきちっと出します。お野菜もちゃんと食べなさいとお母さんが言うのは、意地悪じゃない。子どもの育ちを身体のことを考えて親は言うわけです。この子は親の言うことを素直に単純に信じているんでしょうね。お母さんが出したものは食べなあかん。きちんとした言葉で言えば、「保護者に対する信頼」です。食事に関しては好き嫌いがあります。私、これ好きやからいっぱい食べる、これ嫌いやからちょっと。好き嫌いはこの子の自由ですけれども、出されたものを食べ切るというのは、あなたは選べませんよ。なぜならば、あなたの命を守って育てるのは、お母さん私の仕事やからなと、この子は親を受け入れているんでしょうね。大人への信頼、これはすごく大事です。大人への信頼があるがゆえに、この子の「向かう力」は出てきます。そういうことですよね。

君たちはどうですかね。たとえば、三宮へ買い物に行きます。夏の洋服を買います。（ホワイトボードに「能動性、active」）ワンピースを買います。能動的ですよね。一方で私は自分で買いに行かない、何でもいいんやとあまりこだわらない人もいます。これを「受動性、passive」と言いますね。いい、悪いは関係ないですよ。買物に行く人は、active な人ですよね。しかし、「向かう力」というのはここにはないですね。どちらも決めているから。ここに中動性というのがある。これ、変な言葉ですよね。まだうまく表現できる研究者がいないものですから、こういう言い方になるけれども。買物に行きます、でも買わないんです。そういう人いますよね。月曜になって、「昨日買物行って何を買ったの」と聞きます。「私、何も買わんかった」「えー、せっかく行ったのに何も買わんかったん」。買物に行って買物しないんです。変ですよね。でも、この人は確かに買物をしたんです。それが見えるかどうかです。「学びに向かう力」は見えないんです。これを見なきゃ。（ホワイトボードの「中動性」を差しながら）この人は確かに買物したんです。でも、実際にワンピースは持っていないんです。この人の買物とは何ですか。外国に行き免税店に寄りますと、必ず「May I help you ？」と店員さんが来るんです。困るんです、私、苦手で。そういう時になんて言うか。「Just looking. 見ているだけです」という言葉ですよね。すると向こうは「Sure」と言って離れてくれます。「Just looking」って何ですかね。「Just listening. 聞いてるだけです」とも言いますね。見ているだけの人って何をしていますかね。「今年の流行はこんな感じか」「このブラウスは私の持っているあのパンツに合うかもしれないな」「これはどうかな」とずっと学習してますよね。何もしてないわけじゃない。見ているだけ、聞いているだけというのは、心も身体も忙しく動いていますよね。すごい学習行動していますよね。でも、外からは見えないんですよ。結果出さないから。

「向かう力」というのはどこにあるんですか。君たち、これから先生になったときに「向かう力」

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

というのをどこに見るんですか。そして、これを育てましょうなんて、とんでもない話です。どうやったらいいんですか。今、一つ、食べ物で言いました。大人の信頼が背景にあるぞと。大人への信頼が「向かう力」への後押しをしてくれるかもしれないぞ。これ、あくまで仮説です。買物でいうと、後ろで支えてくれているのは何でしょうか。お財布の中のお金でしょうかね。これは大事ですわ。お金、こんだけしかないから、買えへん。これ大事。それから、去年こういうの買って失敗した経験、知見、自分の経験、買物体験というのがあなたを支えているんですか。あなたの「向かう力」の背景にありますか。他にもありますよね。あなたたちの買物に「向かう力」の背景にあるものは何ですか。どんな力がそれを支えていますか。ちょっと身近な例で悪かったですけれども、いずれにしても、必ず「向かう力」はそんなにゴロゴロ転がっているわけでもないし、簡単に育てられるわけでもない。やはり、きちんとした背景というものがある。ここに教育保育の本質が出てきますよね。それはこれには書いてないです。これからの課題です。

「向かう力」を評価する。すごくおもしろいですね。子どものどこを見たらいいのか。考えたいですね。自分自身の、皆さん一人ひとりの「向かう力」はどんな背景で、どんな支えが後ろにあるのか。そして私たち先生は子どものどんな支えになっていったらいいのか。ということをしっかり考えて、踏まえていきたいなと、この「向かう力」を評価するというので考えているところです。

「子どもと共有・共感する第三の目を持つ」、これもわけわからん話ですわ。第三の目なんてないですよ。でも、聞いたことないですかねぇ。ベテランの先生がクラスの中に居て、後ろで何かしている子どもにちゃんとアドバイスができたり、というのがあって、「先生、なんでわかったんですか、背中に目があるんですか」というときがありますよね。なんでベテランの先生は後ろが見えるんですか。後ろ、見てへんのに。「子どもと共有・共感する第三の目を持つ」、先に結論言っておきます。そのために遊びが必要なんです。そのために君たちは遊べなきゃだめなんです。先生は遊ばなきゃだめ。ところが、今、その遊べる先生が本当に少ない。これでは見えないものを見る目は育たないです。

遊んでいるところの写真を出しましょう。これ、先生と子どもが遊んでいますね。雨上がりです。「子どもと共有・共感する第三の目を持つ」、ずーっと意識しておいてくださいよ。これも遊んでいます。別の先生です。「子どもと共有・共感する第三の目を持つ」ためには、一緒に遊ばなきゃだめ。また別の先生、これも遊んでいますよね。これも別の先生。全部、別の先生です。遊んでますよね。でも、こうやって遊んでいると、おわかりのように、この先生の後ろで何が起きているか、わからないんですよね。この前の３人の子どもたちは相手ができますけれども、後ろにいる子どもたちは見えてませんので。でも、それではだめですよね。先生はすべての子どもに責任持たないと。後ろで転んでケガでもしたら困るじゃないですか。先生、見てませんでしたというわけにはいかない。

子どもを見守ると言います。園庭で遊んでいる子どもたちをいつも立つ位置があって、子ども

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

たちを見守っているんです。ケガをしないように。30分交替です。見守っています。本当ですかね。はっきり言って、あれ、うそやと思います。子どもはそれでは見えないです。子どもを見たいと思うなら、一緒に遊ばなきゃだめ。後ろにいる子は見えないでしょう。ケガをしたらどうしますか。しかし、見えるんですよね、それが。これが第三の目、第四の目、第五の目です。

（パワポ：先生と子どもたちが泥遊びをしている写真）これも先生と遊んでいます。子どもたち25人くらい。これは看護師も入ってます。手が空いたからと一緒に遊んでいる。とにかく遊びます。看護師の認定こども園での業務は、医療行為ではありません。教育活動です。もちろん医療行為もありますよ、ケガをしたときとか、熱性けいれんの発作が起きたときとか。救急車をすぐ呼ぶ判断をせねばならないとか、いろんなことが起きます。でも、基本的には教育保育です。今、認定こども園、幼稚園、保育所の看護師の業務というのは、とってもあやふやなんですね。確立されてないんですね。なので、看護師の先生たちもとても困っています。自分たちが勉強してきた医療業務ではない教育保育とはいったい何なのか。ここの園の看護師はえらいですね、子どもをもっと知っておきたいと子どもと遊ぶということを選ばれました。空いた時間には必ずこうやって遊ばれる。えらいなぁと思います。

で、その次の結果ですよね。子どもと遊んでいると、たとえば、「Modality」という言葉があります。帰ったら辞書で調べてみてください。「感覚」と訳されていますかね。いろんな訳し方がありますけれども。ここに「Uni」と付きます。「一つの感覚」ということですよね。ということは「Malti」も付きますか。「Malti Modality」となりますよね。見ていることは、同時に聞いていることです。聞いていることは、同時に味わっていることです。梅干を見て、目で見てますけどすっぱい、唾液が出てくる。見ていることは味わっていることです。人は認識するとき、考えるときに一つの感覚だけでは認識してないということです。複数の感覚が統合して物事を認識してますよという考え方です。「Malti Modality」と言います。「Modality」は雰囲気とも訳されます。ということは、たくさんの感覚を使って、こうやって一緒に遊ぶことによって、この雰囲気を作り出している、そのことを通して背中で起きていることを感じることができる。このようなことが想像できますね。これはあくまで仮説です。研究者はまだここまで突っ込んできちんとデータを出してこれていない。ここからは梅﨑先生の仕事です。想像はできます。背中で起きていること、なぜわかるのか、ベテランだから？違う。まあベテランだからというのは大事な要素なんですけれども、ベテランだからというよりも、一緒に遊ぶことによって、そこの雰囲気をともに作り出す中で感じることができるということですね。先生は見守っている人じゃない。先生はその雰囲気の中で主体であり、客体です。あなたも雰囲気を作っているんですよということです。これ、すごく大事な考え方です。なので、伝わる、わかる、見える、聞こえるということですよね。

それプラス、ここからは私の考えです。子どもたちと遊んでいます。そうすると、一緒に遊んでいた子どもが一人、すーっと輪から外れました。そうするとそこで遊んでいた先生が2歩程横へ場所を広げるんですよ。下を向いたまま、遊んでいるままですよ。するとスペースが広くなります。しばらくすると、その出ていった男の子が大きな鍋を持ってボーンとそこへ置きました。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ああ、鍋持ってくるから広げたんだ。でも、それがなぜわかったんですか。その先生は聞いてないですよ、その子とコミュニケーション取ってないですよ。みんなと一生懸命遊んでいるんです。なのに、どうしてその子が次に鍋を持ってくると、その先生は気付くんですか。わかるんですか。見えるんですか。終わってから聞きました。「あのとき、君は横にどいたよね。あの子、鍋持ってきたよね。ちょうどいい寸法やったよね。なんでわかったん？」。先生は「あの子はいつもあそこまで遊んで、すっと動いたら必ず鍋持って来て、次は鍋に入れて遊ぶんです。だから、絶対鍋を持ってくるなと思ったら、案の定鍋を持ってきました」。ということは、雰囲気の中で感じ取るだけでなく、先生のより深い子ども理解が背景にはあるということです。別の先生が突然立ち上がって「もう」と言ってバタバタ走っていって、後ろで遊んでいる子どもたちに何か話して、また戻って来て遊びます。「君はなんでけんかが始まるってわかったん？」。「いやあ、だいたい、こういう声が聞こえたら危ないので」。ほう、「こういう声が聞こえたら、だいたい危ないので」と先生は仲裁に行きました。見てないですよ。

未就園児の親たちを集めて「ひよこクラブ」をやっています。子どもたちは別に遊んでいて、子育ての先生がやって来て別室で親たちと勉強しています。子どもが一人泣き出す。すると、お母さんが一人パッと立ち上がります。「すいません、うちの子です」と言いました。なんでうちの子がわかるんですか。子どもたちみんな、同じように泣きますよ。親は自分の子どもの泣き声がなぜわかるんですか。わかって当たり前と言われたら、当たり前かもしれませんけれども、これはまず、間違えることはないです。「見ることは聞くこと、聞くことは見ること、味わうこと」すべてに繋がります。しかし、雰囲気の中で何となくそれができますよ、っていうのは科学的ではなさ過ぎる。私が思うのは、一人ひとりの子どものことをより深く理解できている先生は次の子どもの予想ができる、予測を立てることができる。そこから洞察力が出てきますよね。予測を立てて予想して、比較して、試行錯誤して出て来るものは法則性ですよ、規則性ですよ、概念ですよ。私はまだ、ここまでたどりついていません。でも、おそらく、そこに法則性が絶対あると思います。

最初に戻ってもう一度言います。いずれにしても、子どもと遊ばないとだめです。なぜか？ 子どもがわからないから。そして子どもと共有共感することによって、子どもたちの「向かう力」を育てることができるからです。この二つはずっと繋がっていると思います。「向かう力」を評価することと、変な言い方で悪いんですけれども「第三の目」か「第四」かわかりませんが、確かに見ているけれども聞こえるもの、味わうものという、感覚的な、「Malti Modality」の世界の中で子どもをキャッチする。そのことからより深い子どもの理解を進めていく、さらにキャッチする。その次に法則性が出てくると思います。こうなると、大学の授業の中で君たちにももっとわかりやすく、きちんと説明ができるんだろうと思います。でも、私の能力は今、ここまでです。

今回の認定こども園の教育保育要領、すごくよくできています。全部、つぶさに何回も読んでみてください。そして読めば読むほど、こっそり次の課題が隠し込まれているのがわかってきます。見つかると楽しいですね。立派な先生たちはもう次の課題を見ていらっしゃる。それをずっ

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

と発見しながら、とにかく子どもと遊ぶことを通して、一つでも二つでも見つけることができるのにチャレンジしてほしいなと思っています。

さっき、昼を食べながら梅﨑先生と話をしていましてね、サッカーのロナルドというスーパースターがいますね。皆さん、よくご存じでしょう。パスを誰かがポーンと出します、バーンとシュートします。でも外れたんです。ロナルドがパスをした選手にすっごい顔で怒っています。声は聞こえませんけど、「これだけ違うやろう！」と手で合図していました。バスが不正確やった。「ここへ出せよ、お前がちょっと違ったから、俺がシュートできんかったやろ」と怒っているんです。まあ、これはスーパースターだからできることで、私たちにはそんなこと言えないですよね。ということは、正確性を求めるためには私たちも彼らもいっぱい練習をしなければならない。正確さは練習量によって裏付けられていると思います。一方でスペインサッカーを見ました。パス回しが自由自在。とんでもないアクロバットですよ。平気で後ろへパスします。後ろに目があるかのように。こっち（前を差しながら）見ながら横に目があるかのように。平気で出します。また誰かがそれを絶対に拾います。見事に。見てて本当に気持ちがいい。なんで奴らは後ろに目があるんだ。絶対に後ろに仲間がいるんだとわかるんだ。どうして人のいないところに平気でバスを出して、そこへ誰かが来ると予測が立つんだ。どんな法則性があるのか。じーっと見てるとすっごくおもしろいです。

それで考えました。さっきの話。意外性のあるプレイ、後ろに目のあるプレイ。というのは、チームの中の選手同士の信頼と理解だと思うんです。知らん顔して後ろにポーンと出したら、あいつが拾ってくれるぞ、という信頼と一人ひとりの動きの深い理解があって初めてトリッキーな意外性のある動きができる。正確な動きは練習の積み重ねです。意外性は、トリッキーな動きは、後ろに目のある動きというのは、信頼と理解です。私たちはどちらも必要です。どちらも必要ですけれども、多くの子どもたちを同時に見ていかねばなりません。今までのような教師形式で、幼稚園と学校のような授業形式で子どもを見る時代は終わりました。今回、学校との違いをはっきりと打ち出してあります。学校は書き言葉を中心とした世界。乳幼児教育は話し言葉を中心とした世界です。この差はとっても大きい。そして枠を広げて、一日の保育時間も含めて、カリキュラムも含めて、遊びを通して環境を整えて子どもたちを育てましょう。そうなったときに君たちが保育教諭として、これはまだ名称ですけれども、これから子どもたちの保育教育に携わるときに必要な資質というのは、対面で何かを教えて、それを結果として評価していくやり方では、もう通用しないということです。いくつもいくつも目を持って、子どもたちからいろんなこと、情報を集めて、それをきちっと子ども理解とし、そこから法則性を見い出して、子どもを育てていくという力がこれから必要になります。これからです。今はまだなくてもいいです。私にもまだないかもしれない。でも、それを目指したいですね。

最後に、子どもとどんなふうにして遊ぶのかを見せましょう。（動画）これは梅雨時に園庭に水を撒いて、砂も撒いて、泥んこフラッグをしています。先生も入ります。40 過ぎた先生で大変で

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

すけれども。これで順位を決めています。このグループにも先生が入っていますね。あ、先生が「くそっ」なんてこんな汚い言葉を言っていいんですかね(笑)。でも、負けたら悔しいんですよね。子どもも先生もおんなじです。もう遊びますよ、徹底して遊びますよ。そして、いよいよ子どものチャンピオンと先生のチャンピオンの決勝戦です。(先生がタッチの差で勝つ) 先生、ひどいですね(笑)。子どもは泣いています。ひどいなあ(笑)。そしてオプションで、先生たちでやろうということで…(水たまりの中にフラッグを立ててある。4人の先生たちが泥だらけになっている)(笑)。もう髪の毛までドロドロでしょう。このあと狭い赤ちゃんの沐浴室のシャワーで泥を落としていました。その前を5歳の子どもが新聞紙を広げて隠して待ってあげてる(笑)。「隠しとってよ、見せんとってよ」「わかっとう」と子どもは新聞紙ちゃんと広げて待ってる(笑)。こうやって子どもの何がわかるのか。これはぜひ試してほしいと思います。

今日はまとまった立派なお話ができなくて悪かったんですけれども、宿題ですけれども。保育教諭、まだ名称ですけれども、おそらく大学の中でも保育教諭としてのカリキュラムが出来上がってくると思います。その中で皆さんまたいろんなお勉強をされると思いますが、ぜひ、今日の二つの視点ですよね、「向かう力」と「第三の目」を持つこと。このことを宿題としてずっと頭の隅に置いといていただいたら嬉しいかなと思います。私の話はこれで終わります。ありがとうございました。

一色：赤西先生、どうもありがとうございました。非常にすばらしい。また別の角度で考えると、よく人間というのは人の間と書いてありますよね。今回の赤西先生がおっしゃったのは、子どもも大人もみんな人間だというふうに、私は聞かせていただきました。どうもありがとうございました。では、梅﨑先生、お願いします。

梅﨑：こんにちは、梅﨑です。ちょっとリフレッシュして始めたいと思います。最近、結婚式に参加しまして。非常にあったかい結婚式で良かったですね。若い二人の話がめちゃめちゃ良くて、本当にほっこりしたというか。「付き合ってどのくらいで結婚したい？」そのお二人も長くお付き合いして結婚されたということなんですが、ザワザワしてますが、どのくらいで結婚したい？(笑)。どうぞ(学生それぞれに話し合う)。はい、ありがとう。今日、作ってきたスライドでいちばん力を入れたものなんで(笑)。見てもらっていい？ その二人はなんと…(笑)。10年、10年(笑)出席者に配られるプロフィールみたいなのがあるじゃない。それに二人がいつ出会ったとか書かれているわけ。大学1年生のゼミって書かれていた。大学は恋愛しに行くところじゃない！(笑)。ほんとね、親の顔が見たい。でね、あらためまして、お父さん、おめでとうございました(赤西先生に向かって。場内ざわめき、拍手)。今日は本当にすてきなお話をありがとうございました。

もとより、保育の師匠である赤西先生にツッコミを入れるなんて、相当荷が重くて、逆にこの

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

テーマでシンプルに３点でお話をして、赤西先生が我々にくださった宿題、「学びに向かう力を評価する」「共有共感する第三の目を持つ」ことを考える材料をみんなに提供したいと思います。

まず「時代」。この話はやはり僕がよくしてもらっている安家さんという方から伺った話で、何度か話していると思うんですけれども。今、どんな時代かというと、「大人の目を逃れ、群れて好きなことをして遊ぶことが難しい時代」、おそらく共感してもらえるんじゃないかな。で、僕が子どもの頃、もう40年も前だけれども、こういったことが許されている中で、いろんな経験をして学んできたことがあったように思う。もしね、今の子たちがたとえば、園が終わったら習い事が待っていて、安全の理由から近所でいろんな年齢の子たちと関わって遊ぶことがなかなか難しくて、家に入ればきょうだいも少なくて親の目は自分に集中するみたいなことがあって、群れて遊ぶことが難しいのであれば、もう、これができるところは一つしかないでしょう。園だよ、園。保育所と幼稚園がこれをしてくれなかったら、子どもは育たない。逆にいうと、昔はガチガチのしつけでも良かったと思う。ピシッとさせて言うこと聞けって言ったとしても、家に帰ったら自由だから。でも、今、帰ったときにそれがないとすると、園がこのことに配慮してくれないと、子どもって育ちが保障されない。

もう一つは、赤西先生もおっしゃっていたけれども、時代のニーズもあって保育が「長時間化」しているでしょう。そして「子どもはもとより、大人も守られる保育」デザインが必要かなと。たとえば、今お名前をお出しした安家さんのところ、「あけぼの」がチャレンジしている保育。みんなには１回見てもらっているかな。すごく注目しているんだけれども、「横・縦・斜め割りの保育」。どういったことかというと、標準教育時間では、同年齢の子たちとクラスを形成する。ここには担任の先生が付いている。お昼を食べて保育時間が訪れると１号の子たちは帰る。２号、３号とでさっき挙げた時代の特徴である異年齢の仲間との関わりが少なくなっているので、たとえば年長、年中、年少でクラスを形成していく。そうすると、みんなもよく知っているように、たとえば月齢で仲間を得ることが難しい子も仲間を保障される。さらにさらに、お父さんやお母さんが迎えに来るまでもう少し時間がある子たちは、たとえばこっちのクラスでは制作をして遊びます、こっちのクラスではゲームをして遊びます。なんていうふうに展開されていて、自分の好きなクラスに行っていいんだよと。横・縦・斜めで保育をする。こうすると、標準教育時間にはバチッと担任の先生が決まっているんだけれども、保育時間になったらパートの先生のお力をお借りして、勤務時間の中で担任の先生の研修が可能になる。いろいろ経済的な理由もあって難しさもあるとは思うんだけれども、これから考える余地のある保育のデザインかなと。

赤西先生が見えない力、見えない力とおっしゃっていたことと、ここで少し関連するかなと思って話をするんだけれども。たとえば園は親と子どもを共有して子どもを育てていきたいと思ってる、その機会として保育参加とか保育懇談をする。「あけぼの」でも保育参加をすると、休みが取れたお父さんお母さんが一日子どもと一緒に動く。そうすると、最初のうちは子どもがちゃんとわかる、把握できてる。でも、そのうちに、子どもはめちゃめちゃアクティブだから見失う、「う

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

ちの子は今、一体どこにいるんだろう」みたいな。でもね、だんだんわかってくる。それでいいやって。というのは、バチっと監視されたときに子どもが本性を表すかと言ったら、みんなもそうじゃないじゃん。なかなか難しさはあると思うんだけど、たとえば僕もみんなと付き合っていて、だんだん見えてくる。こうして後ろ向くでしょう、僕はわかる、誰が寝てるとか(笑)。わかるわ。そんなのを目指すといいのかな、先生は。

もう少し具体的に言うと、皆さんの多くはこの夏、幼稚園に1ヶ月実習行くでしょう。最初はカオスだ。どこで誰が何をしてるか、ちっともわからないけど、4週目、最後の週に目指すといいよ。「あ、何々ちゃん、今ここにいないけど、たぶんどっかで何々しているだろうな」と、それを目指してごらん。目指すためには何をするかはみんなに任せるわ。でも、親も気付くんだよ。見えてないけど、それでいいやって。で、それ以前、保育参加する以前は、たとえば子どもがケガをして帰ってきたなんてことがあると、わりと血相を変えて園に注文するみたいなことがあったとしても、とてもずっと子どもを見てるなんてできないと、しかもそれがいいということがわかると、園に言う言葉も変わってくるって。そして、このケガをした経験の中でこの子は何かを学んでいるかもしれないなと思えるようになる。

それから、保育懇談の話ですが、親に先生が聞くと、「うちの子はいいところが一つしかなくて、八つも九つも治したいところが出てくる」なんて言うんだけれど、そんなとき、これも授業でお話したけれども、ハンカチに例えて考えてみましょうと。(手元のハンカチを持ち上げながら)このハンカチを水平にして持ち上げようとするとすごく手間がかかる。でも、一辺だけをつまんで持ち上げても全体が上がったじゃん。これでいいんじゃないの。保育懇談でそういうような話が親と共有できると、ちょっとほっとできたりもする、なんて話も聞かせてもらっています。まあ、そういう時代。

次に「仕事」。そういう時代の保育教諭の仕事って何か。赤西先生も今日の話題提供の中でしてくださったけれども、30年から変わっていく幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園保育教育要領、すごくない？今、言えたけど(笑)。そこで強調されているのが、育ってほしい「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」というところだと僕は思う。そのうちの一つ、たとえば「数量や図形への関心、感覚」。具体的には、こうやって要領や指針に書かれていることをどう保育に落とし込んでいくかということが、みんなの仕事だ。

で、たとえばということで考えるんだけど、あんまりね、難しいことを考えなくてもいいみたい。たとえば砂遊びの中で重さ体験ができ、かくれんぼをしたら広さ体験ができ、これってまさに数量への関心とか態度じゃない？ごっこ遊び、ひしゃくとコップに水を汲んでいるのかな、量体験。園にこんな環境があれば、よじのぼって高さ体験。うちの息子も先生の園でお世話になっているけれども、ドッジボールとかハンターの遊びで数を数えることをすごくやってる。そういうことで、どうもいいみたい。

ちなみに、この写真、この本から持って来ている。高山さんという方が書かれた最近の本(高

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

山静子著『学びを支える保育環境づくり』小学館、2017年)。余談だけど、これ、おもしろいよ。みんな、一度手に取って見てみたらいいと思う。ちょっとどうかするとね、世間の保育に対する見方が厳しくなっているところもあったりするじゃない、でもこういう本を見ると、いやいや保育ってすてきだよと伝わるかも。みんなには関係ないけど、研究者はこういう仕事をもっと、園がやっている、これまでやってきたすてきな仕事をちゃんと世に伝えるということをもっとしないといけないなと、余談ですけど、思います。

で、今、見ていただいたような形で自分たちの園がそういう新しい指針などに書かれているような環境をどれくらい用意できているかということを振り返る、と同時にこういった道具も活用できるのかなと紹介します。これはエカーズって呼ばれる保育環境を評価するスケールで、数や量に親しむ環境が自園にどのくらいあるのかということについての項目です。どんぐりやボタンが保育室にあるとかないとか、日々の保育活動の中でゲームがあるのかないのか。これは海外で開発されたスケールを日本語に訳したものなので、自園の状況に合わないところもあると思うので、園内研修でこういったスケールをまずは見直してみて、そうしてみて、それぞれのクラスをみんなで評価していって、どのくらいうちの園では、たとえば数や量に親しむ環境が整っているのか、考えてもいいかもしれない。これは、これからの保育教諭の仕事の一つかなと思います。

僕の話はそんなに長くしても仕方がないと思うので、最後に、そういう時代、仕事の中で「保育教諭」はどんな人が求められるのか。これを踏まえて、赤西先生の宿題にみんなで答えていきたいと思うんだけれども。一つ、エピソードを紹介するね。息子が居て、「寝るぞ、歯を磨け」と言うと、「磨いた」と言う。「俺にウソつきやがって」みたいな(笑)。どうする？　みんな、ウソつかれたら。絶対ウソやん、だってずっとここにいるんだから(笑)。4択、ザワザワしてもらっていい？　①この場は信じる。とにかく、まあ信じよう、お前がそう言うなら信じるわ。②ホント？と問い詰める。③強制的に磨く。じゃあ歯ブラシ持って来い、俺も磨くから一緒に磨こうと。④やりとりしつつ様子を見る。ああ、良かったな、これで虫歯にならないな、神様は見てるもんなと(笑)ちょっと嫌味言いながら、自分でもう一回磨こうかなと言うのを待つのか(笑)。どうする？じゃあ、ちょっとザワザワしてください。

ありがとう。意見を聞きたいところだけど、言うわ。わかんない、どうしていいか、何が正解かわかんない(笑)。すごく考えるけど。ただ、親はこういうとき、結構インターネットを利用したりすることがあるかな。でも、みんなも言われるじゃん。レポート書くときとか、この後卒論書いていくけど、インターネットのものを鵜呑みにしちゃだめだとかね。ちゃんと出典調べて自分で考えて書けとかね。みんなはそういう態度を養って先生になる人だから、たぶんこれは大丈夫。でもね、みんなが対峙する親は結構インターネットでお手軽に正解を見つけたいと思っている人は多いかもよ。そういう親とどう対話していくかっていうのが、この時代のみんなの仕事だし、保育教諭に求められる資質の一つかなと思う。

で、まとめなんだけど、これを踏まえて赤西先生からの問いに答えていきたいと思うんだけど。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

こんな時代の要請なわけですよ、保育者養成は。うまいこと言った(笑) もう一回言おうか。時代の要請なわけですよ、保育者養成は。何か園に、先生に言ってきたい親も、親なりの物語を持っているので字面どおりに受け取って、それを何とかする、というよりもむしろ、彼が、彼女が持っている物語って何なんだろうと考えた上で、一緒になって子どもを見ていけるといいかも。見えないものを見るということに関係するかどうか、わかんないんだけれども。

そして、もう一つ、これは詳しくはまた月曜にさせていただく授業でお見せしたいと思うんだけど、僕が一つ考えている、こういう時代の保育教諭の仕事ということでイメージしているのは、こういう保育なんですね。何をしているかというと、先生がこの子たちとこういうゲームをしたらおもしろいだろうと考えてきたゲームをぶつけてる。そうしたら、奥に見える緑色っぽいトレーナーを着ている子が先生の発想を超えるような発想をぶつけて来て、みんなでわけがわかんなくなってしゃべっているところ(笑)。5歳。また詳しくは授業でお話したいと思うんだけど。

もう一つ、僕がイメージしたいのは、こういう時代の保育者の仕事として、どういう活動とか遊びを計画したら、子どもたちが食いついてくるのか、ワクワクしてくるのか。そういう問いがぶつけられるということが一つだし、子どもって決して侮れなくて、我々の発想を超える問いをぶつけてくることが、今ちらっと見ていただいた映像にもあるように、そういうことがあるので、その問いを巡って対話ができるということ。直接的に面と向かってバチバチというのではなくて、一緒になって問いを巡ってやり取りをするイメージ。僕はずっと発達心理学をやってきたけれども、大人は知っている人、子どもは未熟な人という発達観をもしかしたら発達心理学は世間に提供してきたかもしれない。ただ、もう一つ、発達観が必要で、子どもって侮れないぞと。ピカソはこんなことを言っている。ラファエロという画家が描いた絵、彼みたいに描くのは4年かかったんだって。でも、あのピカソがだよ。子どものように描くのは一生仕事だと言ったというんですよ。保育の現場で、赤西先生がおっしゃったように子どもと遊んでいると、こういう瞬間って稀にある。侮れないな、ちょっと俺、負けてるなと。そういった子どもを巡ってやり取りできる、あるいはやり取りを目指すことが、この時代の保育教諭の仕事であり、求められる資質かなと、今日は考えています。ありがとうございました。

一色：梅﨑先生、ありがとうございました。それでは時間もないので、お二人の先生方でお話をさらにおもしろくしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

赤西：私の息子が歯ブラシをしなくて、4択、わかりますよ。3年前の梅﨑先生は②番です。今は④番だと思います。理由があります。3年前、息子は非常にきちっとしてきめ細かく、神経質が前面に出てたので、ほとんど動くことがなかった。「おい、もうちょっとやれよ。みんなと遊べよ。自分から行かんかい」と言っても「僕はいいから」みたいな感じです(笑)。ところが今は、マラソンで目覚めたのか、ドッジボールで目覚めたのか、もうブチぎれて、毎日毎日活動的でおもしろくてしょうがない。子どもによって1、2、3、4の答えって変わってくるかな、どう？

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

梅﨑：その話をしちゃうともう終わっちゃうんで(笑)。子どもによって違う。でもそうだと思います。おかげさまで先生の園で育ててもらって、息子は今では友だちのズレたパスに（立ち上がって）こうやるようになってるから(笑)。ロナウドのように(笑)。赤西先生が強調されたのは、子どもが大人を信じているっていう状況が一つの前提で、その中で保育が展開されて子どものことも見えてくる。僕は逆も考えたい。さっきみんなにお話しさせていただいた内容で、赤西先生はどうやって見たらいいのかというお話をしてくださったのに、僕は見えなくてもいいんじゃないかというお話をしたんだけれども。子どもは信ずるに足る存在なんだと思う。見えてなくても、まあまあまあ、うちのゼミ生なんかもゼミ来ないけど、どこで何やってるか見えてるし、「先生、体調悪いから休みます」、うーんうそだなとかね(笑)。見えてるけど、そして卒論は一文字も書いてないけどね、たぶん書いて卒業するし、それを信ずるなんていうきれいな言葉でまとめるつもりはないけれども、どこかで学生を信じる、子どもを信じる、その双方かなと。それがないと、一人ひとりを見るということは始まらないのかな。

赤西：保護者の迷いは子どもが見えないので迷うわけです。子どもが信じられない、自分の子どもが。自分の子どもですから一番好きだし、子どもは母親ナンバー１ですからどんなことでも絶対絆があって知っているはずなんだけれども、子どもを信じることができない。で、子どもが見えないので教えてくれと。「言いなさい、お口でちゃんと言わなきゃわからないでしょ」と問い詰める。子どもはぶすっとして言わないけれどもどう思っているかというと「もうええ」。そして言わないけれども、こう思ってます。「見てわからんもんは聞いてもわからん」。親は一生懸命知ろうとして聞き出そうとする。しかし、親子の関係はどんどんとんがって来る。だから３人子どもを産んでいると、そういう言い方が適切かどうかわかりませんが、ベテラン中のベテランですよ、ある意味では。でも、やっぱり子どものことがわからないというのはなぜなのか。私たちは現場に居て、いつもこれを考えるわけですね。そして、その困っている人に適切な言葉をどうやったら伝えることができるのかをいつも考えます。教育的に指導するのは簡単ですけれども、今日、うちへ帰ってできなければ意味がないからね。きれいなお題目言ったって「そんなん、先生、うちの玄関なんて靴がちらかってて、そんなきれいにできませんって」と言われたらゼロですわ。あなたがお家でできることを、我々は言葉にしてきちっと置いていかねばならない。

話が変わりますが、この間、「なんでこんな簡単なことが…、子どものことは見てたらわかるやろ、子どものことは子どもに聞けって、わかるやろ」と言うけれど、「わからん」って言うんですよ。その理由をいくつもいくつも考えて、一つあるのは、メールありますよね、私はメールしないですけれども、メールって便利ですよね、相手の都合を考えなくてもちゃんと打ったら都合のいいときに返事をくれる。とっても便利なツールですよね。これを批判するわけではない。ただ、夕方の忙しいときに、台所仕事をしているときに電話がかかってきたら迷惑です。たとえば私が電話をしたとしましょう。ちょうど天ぷらを揚げていたとしましょう。相手は火をおとして「ごめんごめん、今ちょっと忙しいから。８時頃にしてくれる？」と電話が切れます。電話は相手の都

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

合を考えないで失礼なときがあります。ただし、電話をすることで相手はこの時間、こういうふうに台所でじたばたしてたのかと相手を想像する、「ごめんごめん、今ちょっと忙しいから」という声の中に怒りが含まれている、でも怒りをぶつけないで何とか納めて8時にしてくれと言葉を繋いでくれる。ということは、掛けた私に対してまだ節度と礼儀を持っている。「こんな奴いらんわ」と思ったら「もう電話せんとって！」と普通は言います。でも丁寧に対応してくれるということは、私に対する礼儀の思いがまだ残っている。こんな風にその人と私との関係を10秒15秒の電話から、いろいろ発見することができます。メールではそれはできません。

子どもの話にもどります。子どもはじーっと大人を見て、大人の目の動き、顔の筋肉の使い方、声の出し方などによって大人を学習します。子どもの学習の仕方は何万年も変わらないですよ。系統発生ですよ。突然順番を飛び越すことはありえないです。メールができて20年ですか。子どもの学習の方法は変わらないです。ボキャブラリーに頼らない、子どもを育てる時は、子どもの学習方法に答えられるような、私たちは感性をずーっと持っておかなきゃだめです。対面でいつも感じ取れるように。子どもは見たらわかります。じーっと見たらいいんです。でも、わからなくなってきているのは、私たちおとなの感性が鈍ってきていると思います。これを親御さんたちと今、考えているところです。だから、便利な生活はいいし、便利なツールも使えばいいですけれど、子どもを育てるときに私たちの節度はどこにあるのか、何をせねばならないのかは、いつも問い直さないといかんかなと思ってますね。

梅﨑：そのためには子どもと一緒に居ないといけないんでしょうね。ふだんはうちの子どもも母親にべったりで、でも時間が取れてちゃんと遊べたときはいろんなこと話してくれたりする。努めてそうしたいと思ってる。先生も一人でたくさんの子どもを抱えて、見えてる子どもよりも、むしろ見えてない子どもの方が多いかもしれないけれども、ちゃんと子どもがわかって来て、見えてなくても見えるようになってくると、さらに子どもが教えてくれるんだよね。「今な、なになにちゃんとあそこで遊んどってん」と。「ふーん、そうなん」。それでいいかなと。ケガするかもしれないけど、保育参加させたら親もわかるから。それでいいかなと(笑)。

赤西：教えてくれるのはほんとにそうですよ。年齢が低ければ低いほどおむつ替える人を選ぶからね、子どもって。あの先生でなきゃだめだと。ぶすっとして、聞いても「いらん」とか、「何か怒っとんちがうん？」「いや、ええんや」と私には言ってくれない。大事なことは、その先生のところにぽつりと困っていることを言いに来る。子どものこの選び方は非常に健康的ですね。だから、皆さんはぜひ選ばれる先生になりたいですよね。私もそう思います。それにはどうするのか。未熟な先生は子どもに選ばれようと思って一生懸命子どもの姿を追っかけ、子どもの情報を集めて、子どもと共有できる情報をたくさん集めようと思って、ポケットにノートをしのばせて一生懸命書きます。一日中走り回って汗かいて一生懸命ノートを取って、何とか子どもと話を共有できるように。しかし、やればやるほどしんどくなるだけで、結果が実らない。そして最後の最後は別

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

の先生が選ばれとるんですよ。自分のところに来てくれない。「なんなん、一体」(笑)。どうやったら子どもとの関係性ができるのかというのは、非常に複雑なおもしろいところで。これは皆さんが自分の親とか友達とか先生とか先輩とかとの関係性とまったく同じだと思えばいいです。親しくしているようでいて、いざとなると、あっさり別れられる仲間と、ふだん関わらないけれども大事なときはその人じゃなきゃだめというときがありますよね。それ、秘密はどこにありますかね。それとまったく同じです。こう考えればわかりやすいかもしれないですね。

一色：最後にですね、赤西先生、梅﨑先生、子ども時代はどうだったんですか。ご自分が子どものときは。そこらへんをちょっと教えてください。1分で(笑)。

赤西：私、子ども時代はものすごくゆがんだ子どもです。おねしょして、チックして、爪はずっと噛んでましたし。小学校3年くらいまでは毎日おねしょしてたでしょうね。友達はいないし。ずっと病気がちで、孤独でゆがんで問題行動ばっかりですよ(笑) 今もそうかもしれない(笑)。

梅﨑：僕は昔も今も王様でした(爆笑)。

一色：ということで、学生の方たちからコメントとかは…ちょっと時間が来てしまったのでここまでにして、このお二人の先生方おもしろいから、4限も来るぞという方がいらっしゃれば来てください。

〈第二部〉

一色：お待たせしました。それでは第二部ということで始めたいと思います。二部ではインタラクティブに今日のテーマについて、皆様方と先生方とやり取りをしていきたいと思います。今日はたくさんの方においでいただいてますので、どんどん手を挙げてご質問ください。よろしくお願いいたします。

一般A：私は高校で教師をやっていた者です。「向かう力」について、知識に対して正面から向かっていくことはむずかしい問題やと思うんですけれども、「向かいなさい」と言ってしまうと向かわない。今、教師を辞めて英語の勉強をしたりしているんですが、自分を動機付けする、子どもを動機付けする、同じようなものだと感じられますが、結局、人に言われると嫌になってしまう。僕もそうですが、勉強しなさいと言われると嫌になってしまう。動機付けというかモチベーションを与えるというのは、すごくむずかしいなとずっと思っているんですけれども。結局、人間の根源的な欲求というか、生きたいという欲求、食べたいという欲求。さっきも女の子がものを食べるシーンが出てきましたけれども、お腹減った、大きくなりたい、強くなりたい、そんなふう

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

な欲求が土台となって、大人でも子どもでも行動していくと思われるので、なので、どういうふうに人間の根源的な欲求というか、足掛かりを求めるか。うまくその足掛かりをつかめれば自分を動かすこともできるし、子どもを動かすこともできるし、その足掛かりの見つけ方が大事なんかなと、むずかしいのかなと、そんな印象を持ちました。

梅﨑：学びに向かう力って何かということが問題で、ただ、保育や幼児教育ではそれしかないと思ったりもします。このことは赤西先生から教えていただいたことなんですが、保育幼児教育の目的とは何かというと、ちゃんと自分がわかって選べるということだ。赤西先生から教わったことで、だったら本人から言っていただいたらいいんですけど(笑)。そのためには、保育活動の中にたくさんのバラエティがあって、たくさんの遊びがあったり、チョイスできる遊具があったり、今日遊ぶお友だちが選べたり、ランチのときに座る場所が選べたり、そんな環境が一つ大切なことかなと。そうやって自分はこういうことが好きだ、これは嫌だ、誰々は信頼できる、誰々はちょっと今は…とか、心性を育んでいける可能性があるだろうと。まさに、そのいろいろな選択肢がある中で、学びに向かっていく力を育てていく時期なのだと、幼児期、そういう時代があって、保育の意味があるというふうに思っています。これが一つのご返答と、もう一つ、先生が動機づけという言葉を使われましたが、動機づけの問題で考えますと、これまでどうやったら人は動機づけられるのか、とくに教師がですね、上から目線で生徒をいかに動機づけるかというテーマが教育心理学分野ではすごく盛んでした。でも、一回、これを捨てましょう(笑)。子どもって興味関心を持って生まれてくる存在で、幼児期にそういうことが成功できていると、ちゃんと自分で選んでいけると思うんですよね。大人から見たら、「なんでやらないんだ」とやる気のない姿と見えたりもしますけれども、それも意欲の表れというか、「ここでは意欲を発揮しない」という現れであったりする。そんなふうな人間観に転換していけると、こちらの保育も変わってくるかなと思っています。

よく学生にも問いかけるんですけれども、いかに子どもを、人を動機づけていくかというテーマはなかなか…、それこそ先ほど赤西先生もおっしゃったように一人ひとり違うので、難しいので、じゃあ逆のことを考えてみようと。どうやったら子どものやる気を失わせることなくできると思うかと。保育の話題にふさわしくないエピソードかもしれませんが、心理学にはこういう研究があって、囚人をどうやったら骨抜きにできるかと。その実験では、囚人に穴を掘れと命じるんです。囚人が看守に「掘れました」と言ってくる。「よおし、じゃあ埋めろ」と言うんです。翌日、また穴を掘れ、で埋めろ。最初、囚人は「なんて楽なんだ、もっとひどい罰が待っていると思っていたのに」。でも、それが3日、4日経ち、1週間2週間になっていくと、もう独房から出てこられなくなります。なぜか？ 自分が何のためにこれをやっているのかわからなくなるから。で、人ってやっぱりそういうときに意欲を失うようで、活動の意味を大人が見せていってあげられると、子どもっていきいきと遊んでいくかなあなんてことは考えたりしています。具体的にどうするんだというのは、ちょっとむずかしいですけれども。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

赤西：小さな子どものやる気を失わせる方法はとっても簡単で、子どもの楽しみを奪えばいいんです。簡単に型にはまります。ものすごく管理しやすくなります。子どもの楽しみって何かというと、とても小さなことなんですけれども、ある園の実践でありましたけれども、「ヨーグルトを食べまーす」と子どもの前にヨーグルトのカップを置く。子どもが手に持って何をしゃべっているかというと、（カップの裏を見るしぐさをしながら）「あ、俺、4や。お前は？」「俺、5や。勝った」とか言ってます。何の話？子どもの楽しみってこんなことで。やがて、ヨーグルトをピッと開けるでしょ、するとツルンとしてますね。そこへスプーンを入れる。そのときの子どもの嬉しそうな顔。これ、子どもの楽しみ。しかし、ある先生は親切で、子どもにヨーグルトが食べやすいように、ふたを開けてスプーンでかき混ぜて、はい、どうぞと渡す。すると子どもはきれいに食べます。先生は意識していないんだけれども、子どもの楽しみを奪ってしまった。こういう小さな楽しみを意識的に奪っていくと、子どもって本当にしつらえられた、先生のやりやすい無気力な子どもたちが出来上がる。

じゃあ、その反対でやる気を起こさせる。「学びに向かう力」はおそらく、一つひとつの課題というよりも、生活そのものやと思うんですね。今、将棋の藤井四段が有名ですね。彼はずーっと将棋のことを考えているんですって。新聞で読んだだけですけどね。生活と将棋の境界線がどこにあるのか、私にはわからないけど、ずーっと将棋のことを考えている。ということは、学校でも先生がこういうことをきちんと評価できればいい。でも先生はそういう評価はできない。なぜかというと、今、相対評価だから。到達度や絶対評価の世界ではないので。先生の評価する視点、評価できちっと後押ししてやる、「それでいいんだよ」と後押ししてやりたいんだけれど、その評価の基準が子どもたちが目指すもの、子どもたちがやろうとしていることとどうもかみ合わない。で、均一化になっていく。だから、おそらく先生自身に子どもを評価する力、相対評価ではない力というのが、これからは必要となっていくのかなと思っているところですね。

一般Ｂ（白川）：私、今びっくりしているのは、この保育教諭のこの課題で、こんなにいっぱいの一般の方が参加していただいたのは…。私も子ども学に関わっていましたので、それで、できるだけ多くの一般の方にお話ししてもらいたいなと思います。それで、ちょっと説明させていただくと保育教諭とは新しくできたもので、ただ、その養成課程がまだできていないんです。今は幼稚園教諭と保育士の養成課程なんですね。今日の「あすの子ども園」ですか、皆さん、保育教諭の資格を持っています。資格は持っている、でもまだ養成課程はできていないと、こういう状態です。今日の赤西先生のお話、すごくおもしろかったんですけれども、「向かう力」と「第三の目」は、保育教諭に限ったことではなく、保育士にも幼稚園教諭にも、子育てをしているお父さん、お母さんにも当てはまるなと思っています。

一般Ｃ：私はもう20年、参加させていただいてますが、20年前と今と全然違いますね、教育の取り組み方が。私は戦後すぐの生まれですが、娘を小学校１年に入れたときに私が受けた教育と

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

おんなじやり方で、ものすごくショックを受けたんです。こんな教育をまだやってるって。それから私は教育に疑問を抱きまして、自分なりにいろんなところに参加させていただいて、ここは最初に小林登先生がされてらして、20年間時間が許す範囲で参加させていただいてます。今年はとくに楽しい授業を受けさせていただいてありがたいです。先月も良かったし、今日の授業もとても楽しかったです。ありがとうございました。

赤西：（梅﨑先生と）我々は最強コンビと言われていますから(笑)。

一色：どうもありがとうございます。それでは他の方で…

一般D：私立のこども園から参りました。今日は本当にありがとうございました。お話の中で横、縦、斜めの保育のことをお聞きしました。保育時間の中で保育教諭の研修ができるとのことでした。私も38年間幼稚園の現場にいまして、4月からこども園に入りました。その中でこんなに研修ができないんだなと実感しました。先生方の保育を見ていましたら、あと一押ししてあげたら…、何のための援助？子どもをどんなところから見ているの？という、あと一押ししてあげたら絶対実りのある援助ができるのになとすごく思います。幼稚園は園内研修ができるんですが、こども園はなかなかできない。私は修士論文で「新任教諭のとまどい」というテーマで描いたのですが、保育園に近いこども園に入ったら「新任教諭のとまどい」よりも、大学で学んできて現場に入って、私も今、大学で幼児理解を教えているんですが、大学でしっかり教えても現場に入ったらそれが違っている、自分が受けた授業と違っていてとまどう、自分なりに一生懸命保育しているんですが、何かが足りない。先生がおっしゃっていたように評価まではいかないけれど、何とか自分が目的を持ってやっているんだけれども、見つからない。そうするとだんだん保育に気持ちがなえてくる。そこに園内研修があったら、たぶんこの先生方は伸びていくんと違うかなと思うんですが、その園内研修をどのような形でどういう場に入れていったらいいのかなというのが、すごく悩みです。赤西先生のお話の中で、パートの先生に入ってもらってというお話でしたが、幼稚園でしたら一人の担任が一つの学級をやっていて、保育時間はだいたい9時から14時くらいまでですよね。一日の保育の流れをずっと一人の先生がやっている。こども園だったら、ある程度の時間が来たらほかの先生にタッチする。そういう保育の流れをどう考えていったらいいのかということと、園内研修をどういうふうに入れて言ったら先生方の研修になっていくのかというところ、そのあたりが、私が今悩んでいて考えていかなければならないところだと思っております。

梅﨑：一つの例としてお話をさせていただいたんですが、現実としてどのくらい可能なんでしょうね。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

赤西：「あすのこども園」の園長がいらしているので、お話していただいたらどうでしょうか。現場の声として。

梅﨑：具体的な、職員の組み方ですとかね。

一般Ｅ（あすのこども園園長）：今、園内研修のことを考えていなくて、育ってほしい10項目について考えていました(笑)。園内研修については、私たちもこども園なのでなかなか時間が取れないですけれども、法人で研修の時間を持ったりですとか、夜に研修したり、お昼寝の時間にちょこちょこ集まったりして、いろんなことを話し合ったりしています。

ちょっと続きで10項目の話をしてもいいでしょうか。10項目について私たちも実践できるようにとプログラムを考えて、具体的な活動に繋げたものを一生懸命作っています。今年、それをテストで実践したいなと思っているんですけれども。今日お話を聞いてて、これは性格というか、その人の尊厳みたいなもので、自立心であったり協働性、言葉による伝えあいであったり、全部まとめたらその子らしさになってしまって、それはこんなふうに育てられてしまうものなのかという感じを受けました。カリキュラムにして具体的な活動として共有することで、先生同士でやり方を共有できることとか、子どもが受ける恩恵も確かにたくさんあると思うけれども、私の中ではこれだけ10項目全部が育った子どもというのが想像できないし(笑)、梅﨑先生にどう思われるかなと教えていただきたいと思います。赤西先生にも(笑)。

梅﨑：(ハンカチの一辺をつまみあげながら）僕はこれかなと思っています(笑)。今、先生がおっしゃった「こういうものって育てられてしまうものなのか」という見方って大切にしたいなあと思っています。先ほどの先生のご質問で子どもをいかに動機づけるかというお話もありましたけれども、僕がそういう発想から脱却したいなと思ったのも、まさに同じ立場からでして、つまり、子どもって常に動機づけられないといけないものなのか、逆に子どもと一緒に遊んでいると、大人を凌駕するようなアイデアが出てきて、それに触れて逆に私自身がもっと何か伝えたいとか、もっと関わってやろうと思わされるものがあります。そこでは動機づける方向が逆転していて、子どもによって大人が動機づけられるみたいなこともしばしば現場では起こっていると思います。話が脱線しましたけれども、10項目をどう考えていくのか、育てる対象として見るべき項目なのか。国は地域差ですとか、特徴ある園に一律に迷いのない発信をしないといけませんので、ああいう表現になるんだとは思いますけれども、各園の裁量でその辺りは、実際の保育に落としていく段では工夫というか、自園の先生方でどの辺を落としどころとしていくのか考えていくのかなあと。つまらない回答になってしまいましたが…。

赤西：さっきの園内研修ですけれども、こども園になって確かに幼稚園スタイルであっても、一日7.5時間働くのに子どもがずっと居るわけですよ、幼稚園は子どもが居なかったから研修でき

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

たんですけれどね。だから労働時間が同じでも園の環境が全然変わってしまっているので、園内研修するのがすごくむずかしい。その中でも、これは有利かなと思うのが、複数担任が多いことかな。どうしても長時間になりますので。複数担任が多いということは交代で一人出て、昼間に各クラスの代表が集まってミーティングをすることの可能性が出てきます。それを伝達する。十分ではなくてもいろんな可能性が出てきます。ですので、この複数担任を上手に使ってローテーションを組んで、昼間の時間でもいいんで上手に使うことはできます。私どもは法人が大きいので、やはり夜の研修とかしょっちゅうしてまして、もちろん全員は来れません、仕事がありますので。でもだいたい半分くらいは集まります。それを何回かすると回ってきますので。いろんな機会で今の状態で取り組めることをなさればどうかなと思います。

それと10項目ですが、私はまったく逆の発想を考えてまして、狙いを定めて内容があって、実践をして振り返りをするというパターンでずっと来るわけですけれども、これ、全然違うなと思うわけですね。今、スライドショーで見ていただいたように、継続的、計画的、組織的な“生活”をドンと作るんです。とにかく、ひたすら遊びを入れます。こんな遊びをずっと入れます。遊びも1回きりじゃない。ずーっと継続して遊びを入れます。そこに子どもたちが入ってきます。この時間はこれ、この時間はこれと、ずーっと継続的にやる。3～5歳児は合同で遊ぶ、また別の課題では、5歳児だけ、4歳児だけというふうに決めて、継続的に計画的にきちっと続けます。お昼に飯を食うのと同じで、この時間にはこの遊びをしようぜと仕掛けます。ですので、狙いを持ってこれを育てるためにこういう活動をします、食育のためにトマトを植えます、ではなくて、“生活”があるんです。その中でこの10項目をこの切り口で見てみましょうと。たとえばこういう遊びで子どもの協働性とはどう育っているのかというふうに、逆にこの項目を切り口にする。育てるべき狙い、内容、実践、振り返りのきっかけにするのではなくて、すでに子どもの生活があって、切り口にしてそこから子どもを見ていく。この一つのきっかけにすればいい。そのためにはまず、今日の、明日の、来月のきちんとした保育のあり方みたいなもの、ここをまずしっかりやろうというのが、今日スライドで見ていただいた園のやり方。非常に、なんていうか…、私に言わせると斬新な、実験を伴うし、まだいろいろ課題はあります。そこから何が生まれて来るかはこれからで、そこはまだまだ整理するのが力不足で、ここは梅﨑先生に助けていただいて、それこそ科学知の力をお借りして、きちんと普遍化していけるものになればいいなと考えているところですね。

梅﨑：今、先生のお話を伺っていて、PDCAサイクルってよく耳にします。でも、保育や教育ってそのサイクルに乗らないのかなと。うまい言い方が見つからないんですけれど、たとえば見る、seeに始まってseeに終わるのが保育なのではないかと思います。

一般B（白川）：私もある本に書いているんですけれども、PDCAじゃなくてODCRと言っているんですけれども。やはり観察が、子どもをじっくり観察すること。それで今日の赤西先生

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

のお話に通じるんですけれども、「向かう力」というのに、ただ見てる、あの just looking、just listeningっていう、あれが最初にこなきゃいけないんですよね。教育界ではとにかく目標を立てて、その目標に見合う活動を組織してエビデンスがどうなったかとか、そんなことばっかり言うんですけれども、子どもには育つ力があるんです、本当に。ですから、子どもの「向かう力」を育てるということ。それと、保育者も「向かう力」が必要なんですね。子どもに対してもね。保育者の「向かう力」っていうのは、経験とか子どもへの信頼とか保護者への信頼とか、そういうのが背景にあって「向かう力」がだんだん育っていくという。私は ODCR って言ってたんですけど、O っていうのは積極的観察、五感をフルに使って子どもを観察するという、そういうものなんです、ただ見ているだけじゃなくて。

赤西：今おっしゃったように教育界のアプローチの仕方っていうのは、私は今思いますけれども、とても高尚な、技術も含めて知見の積み重ねも含めてのような気がしますけれども、ある意味、とても俗っぽいアプローチの仕方。だって、それってどこでも見られることで、公園の親子を見てたら絶対言いますからね、「あなた、やってみなさい、滑り台行きなさい、私はここに居るから、いいからやってみなさい」、そして「先生、うちの子はなんで行かないんでしょう」と。親は早くさせたいんです、みんなと遊ばせたい。お母さんと一緒に居て離れない子は情けないと思っている。これはどこでも見られることで。そうじゃないんや、お母さんのスカート握っててもいいんや、その場所を貸してやって、ここは大事なんだよという発想を親は持てない。「え、いいんですか、これで」と。だから、俗っぽいと言ったら失礼ですけど、教育界のアプローチの仕方はどこでも見られるような。でも先生がおっしゃったように、どこか違う、順番が違うというのはおっしゃる通りで、私もそう思ってます。子どもにさせるな、子どもが見られる場所を作ってあげましょうと言うと意外な顔をされます。皆さん、「させなくていいんですか」と。このしばりに私たちはまだまだとらわれているかなと思いますね。

一般 F：私は認定こども園からきました。いいお話をたくさん聞かせていただいてありがとうございました。今、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 項目の話も出ておりますが、今までのお話を聞いておりまして、一番思うのは、大人の側が子どもをどう捉えるか、子ども観、子どもとは何なんかというところをもう一度しっかりと考えていかなあかん時期なんかなあと思います。どうしても大人が上にあって、子どもにこういうふうになってほしい。保護者によく言うんですが、我々大人がこの世の中をつくっている、この程度なんで世の中もこの程度だと。ここに居る子どもたちはこれから世界なり、日本なりを変えていかなあかん、「子どもは未来である」という小林先生のお言葉がありますけれども、子どもたちの方がずっと可能性があるので、その子どもたちの可能性をもっともっと高めるように。そうするためには、子どもをどう捉えたらいいのか、その根本的なところを、ぜひ子ども学科で…(笑)、英知を集めて考えて、子どもとはこうなんで、こういう教育目標があって習いがあって…というんじゃなくて、子どもからもっと学んでいきま

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

しょうよと、子どもの可能性をもっと引き出すためにもっとこういうふうに考えましょうというようなことを出していただければ、ありがたいと思います。

梅﨑：がんばります！(笑)。

赤西：それで、ずっとたどりついて、子どもってすごいよね、こんなことができて、こんなことで笑えるんかと、いろんな経験があって、子どもを見直そうと言って、我々と同じじゃないし、小さな大人ではないし、で、たどりついたところにあるものは何かと言うと、子どもを尊敬するっていうことやと思うんですよ。この領域にいくのには何十年かかるか？そうなると先生はとっても楽になれるんですけれども、学生の皆さんははっきり目標を定めて、口先だけじゃなくて、子どもの生き様をきちんと尊敬できるという、こういう高い目標というか志を持った指導をしてほしいね(笑)。

一般G：今日はお話をありがとうございました。保育士や幼稚園教諭の養成学校がたくさんあって、私も授業内容とかはあちこち知っているわけじゃないんですけれども、学生さんにふさわしいというか、今からの時代に合ったというか、子どもの見方がわかったり、わかるきっかけとなるような授業がたくさんされたらいいなと。今回のようなお話が他の養成学校や先生を目指される学生さんが聞ける機会があればいいなと思ったのと、保育施設や教育施設がたくさんあって、先生もいっぱい居るんですけど、その中で遊びって大事やなあと思っている先生はどれくらい居るんかなあとか、そんなふうに思える先生が増えればいいなあと思いました。

赤西：それはこの大学の教員集団を批判しているってことやね（笑)。

梅﨑：この大学の授業の一つに白川先生の時代から遊び学習論っていう授業があって、白川先生がご退官された後も専任教員がずっと守っていまして、遊びの大切さは学生といつも共有したいなと思っております。今日はOGの、大学を卒業して現場で活躍している、頑張ってくれている保育士さんが来てくださっていて、彼女の後に続くような人を現場の先生のお力をお借りしながら、もっと言うと子どもの力を借りて、保育所、幼稚園にもっと遊びに行かせていただいて、関わらせていただいて、教えていただいて、就職した後も育てていくというか、みんなでうまくやっていけたらなといつも思っています。今日、園の先生方も多く来てくださっていて、本当にどの園にもお世話になっていて、至らないところは目をつむっていただいてますけれども。今日、僕が短い時間ではありましたが、お話させていただいたようなことは授業の中でもしていないことはないんです。ただ、学生が本当に聞きたいタイミング、聞けるタイミングもあると思うので、砂に水が染みこむようなタイミングをいかに作り、そのタイミングで話をしていけるかということが問われているなと思います。結構、うちの大学の学生たちは捨てたものじゃなくて、うまい

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

タイミングでちょっと話をすると、本当に深い話ができるような様子もありまして、それをいかに支えていくか、課題ですね。ありがとうございます。

赤西：研究者の悪いところで、一旦は聞くふりをして必ず後から切り返すという(笑)。

梅﨑：そんなことなかったですよね(笑)。できたら、こども園の先生のお話もお伺いしたいな。

一般 G：何を質問しようか、いろいろ考えていたんですが、理事長塾や日々の保育ミーティングの中でいろいろ疑問に思うことは話し合っていっているので、ここで出せるような質問はちょっと思い浮かばなかったんですが(笑)。今、懇談のシーズンで今日もある男の子の懇談がありました。今、活動でドッジボールを取り入れているんですが、ドッジボールは言葉のキャッチボールが繋がることがあるんだよと言われていて、自分で言うのもなんなんですが、私はドッジボールのキャッチボールはうまいんですが、園長先生から言葉のキャッチボールはまだこれからかなとアドバイスをいただいていて(笑)、今日の皆さんの質問などのやり取りもとても勉強させていただきました。ありがとうございました。

一色：時間もだんだん少なくなってきましたけれども、まだ手を挙げていらっしゃらない方、コメントとか質問などいかがでしょうか。せっかくおいでになっていらっしゃいますから、一言でも二言でもいかがでしょうか。

一般 H：今日の話とはズレるかもしれないんですけれども、サッカーのお話のところで信頼関係という言葉があって、私の中でとてもクローズアップされているんですが、今、ベストコンビを見てて、ああ、そこにはまさに信頼関係があるんだろうなと思うんですけれども、じゃあ、それってどうやって作っていくんだろうと、年間計画でも子どもと信頼関係を築いていくだとか、保護者と信頼関係を築いていくなどの文言は入れますけれども、じゃあ、どうやって作っていけるものなんだろうって、自分を振り返りながら話半分に聞いてました。

梅﨑：これは、本山北町あすのこども園園長の春名先生が教えてくださった話なんですけれども、信頼関係を結ぼうと思って大人でも子どもでも近づいて行ったら、それは下心だと(笑)。たとえば遊びを通して醸成されるものが信頼関係と呼ばれるものなんじゃないかと。ずっと覚えてます。学生も実習で出ていくときに、子どもと信頼関係を結べるようになりたいと目標を書くんです。なので「それは下心だよ」と伝えて送り出します。「そうじゃないんじゃないか、考えて来て」と言っています。

赤西：うまいこと言うね(笑)。この間、子どものサッカーのレフリーをしてて、チームに分かれ

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

て試合をしてるんですけれど、なかには興味のない奴がおりますから、だらだら、だらだらしてます。あんまりだらだらしているから、私はレフリーとして笛を吹いて止めてイエローカードを出します。「やらないんだったらゼッケンを外して出ていきなさい」と言います。みんなシーンとして聞いています。イエローが出ましたから、相手のゴール前でしたが、フリーキックですよ。先生も入ってみんな一生懸命やってますから、ある先生が「かんたのせいや、フリーキックになってもた」と言いました。それで私はその先生を呼んで、レッドカードを出しました。その先生びっくりして「なんで私がレッドですか」と。私がかんたにイエローカードを出したのは、だらだらしているとスピードあるボールが当たって危険が伴う。向き合って一生懸命やっていると、少々のボールでもそんなに危険はない。でも気を抜いてると危ない。危険があるから出ていきなさいという意味でのイエローです。「誰それのせいでフリーキックになってしまったという意味ではない。君は頭を冷やしなさい」。1分間退場しました。その間、プレイが止まって先生たちもじーっと話を聞いています。説明も何にもないんです。その話を聞いています。そしてプレイが始まる。信頼するっていうのは、お互いに信頼してるよな、信頼してるよって言うのではなく、おそらく、みんなが納得できる意味のある言葉、意味のある行動、意味のある生き方ができているかどうかだと思います。それを見て納得できれば信頼でしょうね。いくら、きれいに言っても、挨拶きれいに言っても、訓示を垂れても、そんなのきれいごとやと思ったら誰も寄っていかない。おそらく、意味のある一言を状況によって生み出すことができるか、そのことによって信頼されるかどうかは違ってくるのかなと、日々、子どもを触ってたら思いますね。

一般Ⅰ：先程のお話の中に子どもを尊敬するという言葉が出てきましたが、スライドの中にもピカソの「ラファエロの絵は4年で描けるけれども、子どもの絵は一生かかるだろう」という言葉、それと赤西先生の「子どもってこんなにおもしろいんや」という、ヨーグルトのカップの裏の数字を見ておもしろがるというようなことが頭に残っているんですけれども、私も小学校の頃に牛乳パックの三角の部分をペロッとはがしたら、虹色のバーコードが出てきた子が特別扱いされるとか、そういうことがあったんですけど。今思えば、なんでそんなことが楽しかったんだろうと思います。子どもが楽しいと思う心、うまく言葉が出てこないんですけれど、そういう気持ちを持ち続ける。今はこんなことおもしろく思わないけど、そういう心を育てていきたいと思います。こういう気持ちは子どもとの関わり、子どもとの生活の中でしか鍛えられないでしょうか。先生方はどういうところで鍛えていらっしゃるんでしょうか。

赤西：そりゃあ、ひたすら毎晩ビールを飲むこと(笑)。まあ、おそらくそこで思い出す言葉は一つだけで、生き方に関して子どもに向き合って、手を抜かない。手を抜かないっていうことは大事かなと思いますね。

梅﨑：先生がそんなふうにお考えになっていることも僕はリスペクトしたいと思うんですね。た

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.

だ、うちの学生、卒業生でもいるんですけど、すごくまじめなのでずーっと考えちゃって、しんどくなってしまう人も、また多いと思っているんです。子どもって見てたらおもしろくて、かわいいと思うんです。でもいろいろ先生がしなくちゃいけない状況の中で、なかなかそういうふうに余裕を持って子どもを見ることができなくなっていて、なんか難しさが起きているのかなと。だとすると、どうしたらそういう信頼性を育めるかということよりも、僕はむしろ保育全体の枠組み、たとえば各先生の仕事の分量はどうなっているのかというようなことにも改善の余地が残されているんじゃないかと思います。僕はこんなふうに偉そうに子どもの話をしていますけど、家に帰ったらいつも言われます、「子どものこと見てるの、誰だと思ってるのよ」って(笑)。僕はほんとにたまにしか子どもを見ないから。すごく余裕があってかわいい、かわいいと言ってますけれど。どうも奥さんは大変なようです(笑)。

赤西：でも思いますけど、子どもとおもしろさを共有する、子どものすごさは…って言っているうちは、まだ無理やと思います。子どもよりもっと先、一歩でも先におもしろがらないと。子どもより半歩、一歩先でおもしろがる。これができなかったら、子どもと共になんてきれいごとになります、しんどくなってきます。自分がおもしろがらないと。これはすごく大事なところですよね。

一色：ありがとうございました。いつもより長時間になってしまいまして、大変申し訳ございませんでした。私も今日はとてもおもしろく、楽しく聞かせていただきました。とくに今日来られているのは先生方が多いと思うんですね。これから幼稚園、保育所から幼保連携認定こども園に移行していくと、先程赤西先生もおっしゃっていただきましたが、そのためには、実はどうもよくわからないところが私、あります。文科省、厚労省、内閣府、これらが一体となって子どものことをきちっとやっていかなければいけないのだけれど、文科省は幼児教育課と教職員課、厚労省は保育課、内閣府は子ども子育て支援制度等々というようなことで、国や政府がもう少し何とかしてほしいなと思いましてね。先程、小林登先生というお名前が出ましたけれども、先生は「子ども省」を作ってはどうかということもおっしゃってました。これからの時代は省ごとに自分のところ、自分のところというふうにならないように、先生方ががんばっていただきたいと思います。では、今日の子ども学講演会はおしまいにしたいと思います。どうもありがとうございました。

Copyright (c) 2018,Child Research Net and
International Center for Child Studies (Konan Women's University), All right reserved.